

『デジタルレコーディング委員会』委員長インタビュー

Q1：委員長就任にあたってひとことお願いします

A1：ローランド株式会社の飯田です。
昨年末に前任の岡田さん（ソニーマーケティング株式会社）よりデジタルレコーディング委員会の委員長を引き継ぎました。この有意義な委員会のお役に立てればと思います。
特に先輩方に築いて頂いた企業の枠を超えた率直なムードを大切に、企業とユーザーが信頼関係を築けるような環境を整備したいと考えています。
何分にも不慣れなためよく解らない点もあるかと思いますが、宜しくお願いします。

Q2：デジタルレコーディング委員会について簡単にご説明下さい

A2：デジタルレコーディング委員会は、デジタルレコーディングに関する知識を広め、それを通じてユーザー啓蒙を計る事を主な目的としています。メーカー間の技術的連携をとり、その活動成果の積極的活用を行うと共に必要情報をユーザーへ告知する活動を行っています。

Q3：デジタルレコーディングの市場動向を教えてください

A3：現在「録音する」といえばデジタルがあたりまえの時代です。機器はこの数年間で大幅に低価格化し急速に普及、アナログ・レコーディングを知らない世代に移りつつあります。そしてパーソナル・コンピューターによるマルチトラックコーディングも普及が進んでおり、クリエイター人口が急増しています。
個人ユーザーのいわゆる「ベッドルーム・スタジオ」においても3台以上の異なるメーカーの機器をデジタルで接続するケースが増えています。経験やノウハウのあるエンジニアが対処していたような問題に知識やノウハウのない一般ユーザーが対処しなければいけない時代となっています。

Q4：現在の活動内容を教えてください

A4：平成13年度はデジタル関連機器間で良好なインターフェイスを確保できるように勉強会や動作の検証実験を実施しました。テーマは「タイムコード」や「ワードクロック端子」等であり、デジタルでシステムを組む際に重要となるものです。実際に各社機器を持ち寄り動作の検証を行うこともありました。検証実験がユーザーにとって有意義であることはもちろんですが、参加頂いている各メーカーの担当者にとっても他社機との動作や音質の比較ができる貴重な場となりました。
これら活動内容のうち普遍性のあるものは「デジタルレコーディングに関する知識情報」としてホームページ上で情報公開し、ユーザ

ーが自由にアクセスできる環境を実現しています。
制作現場で発生するトラブルとしては「デジタル接続ではノイズが出てしまう」「映像機器との同期がとれない」等があります。

これらの問題は知識とノウハウで対応可能なものがほとんどですが、現場では原因の探求を行うわけにはいかないものです。検証実験によって「なぜそうなるのか？」という部分まで踏み込むことができ、その結果を各メーカーで共有できるのはAMEIという開かれた場であるからだと感謝しております。

Q5：現場の声を反映した活動を展開しているそうですが

A5：本年度よりミーティングにJSPA（日本シンセサイザー・プログラマー協会）の会員にご参加頂いております。JSPAのメンバーはプログラミングのみならずデジタルレコーディングにも精通しており、現場の声をリアルタイムで伺える貴重な機会となっています。また検証に際してのアドバイスや機材の調達等もご協力頂いております。厳しい現場の意見が入ることにより活動内容も制作現場に直結した密度の高いものになりました。

Q6：今後の抱負についてお聞かせ下さい

A6：デジタルレコーディングを取り巻く環境は急速に変化しています。従来メディアの多チャンネル化およびブロードバンドの普及に伴い、流通する音声データ量も飛躍的に増加しています。また同期やDVD等、映像への対応も必要です。
送出するメディア環境環境も大きな変化を遂げています。
このような現状においてデジタルレコーディング委員会の課題が尽きることはありません。MIDIとの連携、著作権保護等への配慮も必要であり、他の専門委員会、部会、WGとの緻密な連携を取りながら業界の活性化に繋がる活動を展開してゆく所存です。どうか宜しくお願い致します。



飯田厚二委員長